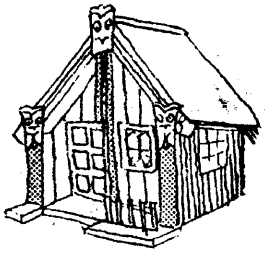


層雲峡 ⟶ 網走

5班　短食２の２
（本郷，松広，藤田，宮川，
西島，藤井，堀部，堀，細川）

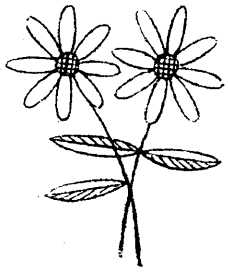
7月２０日（第６日目）

今日で北海道旅行も６日目。快晴に恵まれ早朝，層雲峡を出発する。バスの両側は深い谷底，まるで函の中にいるようである。ここから大函，小函と言う名前が出たらしい。銀糸，流星，銀河の滝がある。大函で下車して記念撮影。この付近一帯には，葉の直経が１mもあるような山フキが生えている。フキを傘にちよつとスマシ顔。峡谷を過ぎると森林地帯でトドマツ・エゾマツを主にした素晴らしい原始林。通つている道路は大雪国道。林間を登りつめたところが石北峠。北海道で一番高い峠であるという。石北峠を下つて行くとイトムカ水銀鉱山があり，ここでは病院等あらゆる設備が整つていて，ちよつとした町の感がある。ここの水銀鉱山では日本の水銀の９５％が生産されると言う。

もう大分バスに揺られて退屈な旅が続く。そろそろ，睡眠にもあきてきた頃である。後何時間揺られるのかな，と思つて時計をみるともう１２時過ぎである。「あら，まだ昼食をしてないんだわ。」いつもならまだこちらのお腹が空いていない頃とか，遅くとも１２時までに食べさせていただいているのに……。こういうところで食物科ということが現われてくる。皆，○より○気の方が発達しているらしい。家並みはまだ見当りそうにない。バスの両側には遠くなり近くなりして，ずつと丘が続く。この付近はスズランの産地であるという。ガイドさんの話によると，スズランは乳牛を飼つている農家には嫌われるという。なだらかな丘を見ていると心まで広々としてくるようである。やつと御飯にありつけたのが午後２時頃。急ぐ心をせきたてて，おもむろに丼のふたをあけたら北海道うまいもの名物の一つである，かに丼であつた。お腹が空いていた事もあつたが，朝から天気が良かつたので，とてもおいしかつた。このかに御飯に，チーズを使用している。いない。で，意見が対立したので，この際，作り方を北海道旅行のお土産にと，ちやつかり調理場へ聞きに入つて行つた。このかに御飯の材料は，かに，バター，砂糖，塩，紅生姜。作り方は，いとも簡単で，バターを溶かし，かにのほぐしたのを充分炊めて御飯の上に置き，紅生姜

の線切を色良く置けばよいのである。

昼食が終ると又バスの旅が続く。お腹が一杯になると眠くなるのが常で，別に見る所もなく皆，眠つている。今晩の宿泊地は網走。バスは一路網走に向つて進む。



網走 ⟶ 弟子屈

6班　短食2の1, 2, 4
（村永，山口，福田，谷本
平木，石田，松下）

7月21日（第7日目）

「この朝食は何んとまあ上品に盛り付けてあるのだろう！」

「昨夜の豪華さに比べてあまりの変り様だわ。」

「昨日のが良すぎたのかな！？」

「何んと言つてもあの毛蟹は最高だつたわね。」

例の如く賑やかな朝食を終えて，昨夜の宿である網走湖荘をあとにした。外は生憎の曇空である。それに山頂は霧が，かなり発生している様子。途中でとうとう小雨が降り出してしまつた。しかしバスは小雨の中をついて一路，美幌峠へと向かう。『今日は美幌峠と摩周湖です。天気の神様。どうぞ晴れて下さい。』と一心に祈る。しかし峠に近づくに従つて増々霧が深くなる。山頂の近く一面に生い茂つている熊笹が，わずかに我々を慰めてくれる。峠に着いてはみたものの，霧が雨のように吹きつけ，視界はゼロ。待ちくたびれ霧を恨みながら美幌峠を後にする。すると，どうだろう。数メートル下つただけなのに，あんなに待つていた屈斜路湖が見えるではないか。皆思わず窓に顔をつけ，見入ることしばし。「ワアー。見える！　見える！」まるで小学生のように騒ぎ出す。バスは峠を下り，和琴半島を左手に美しい白樺林を尚湖に沿つて，昼食の場である川湯へと急ぐ。途中，池の湯の小さな天然の露天風呂におばあさんが一人，バスの騒音をも，ものともせず，静かに入浴しているのを見て思わず微笑んでしまう。池の湯から少し行つた砂湯で下車する。「湖の波打際の砂を堀ると湯がわき出る。」と言うことで，傘を片手に童心に帰えり，一生懸命，砂を堀ることしばし。「アツ！出て来た！」「あつい！」あちこちから聞えて来るかわいらしい声。